



「彗星物語」

一問一答

宮本輝氏に「彗星物語」にまつわる背景やエピソードなど、ミュージアムからの質問にお答えいただきました。

「彗星物語」のタイトルは、
どのようにして決まったのでしょうか。

初 めて小説を書いて同人誌に載せてもらったとき、師匠の池上義一さんが編集後記に「突如彗星のごとく現れ九十七枚の若さにあふれた処女作を発表。若いやつにもたいしたのがいよる。横道にそれずまっすぐ伸びよ」と書いてくださって、その言葉がずっと心に残っていました。

ハンガリーからの留学生、セルゲイ・イシュトバーン（愛称…ピシュティ）と偶然出会って、いろんなことをなんとかクリアしながらうちの家族になった。あいつも彗星の如くうちに現れたな。考えてみると人間はみんな彗星のごとく生まれてくる。みんな彗星だな、そんな意味をこめて「彗星物語」とつけました。

「彗星物語」執筆の思い出をお聞かせください。

ピ シュティがハンガリーに帰ってから、「家の光」という雑誌に連載しました。ずいぶん長い連載なんです。1回に原稿用紙15枚というときと少ない。でもできあがったときには長編になっていないといけない。新聞小説とも違う、これまでとは違う息遣いのような苦労がありました。またずいぶん忙しい、同時に3つか4つの連載を書いている頃でした。

「彗星物語」には、城田家の人々をはじめとして大勢の人物が登場しますが、こんな大家族はどうですか。また、思い入れの深い登場人物はいますか。

自 分は大家族で育ったことがないので、一度大家族を書いてみたいと思っていました。

一番思い入れが強いのは、やっぱり福造おじいちゃんですね。ドラマでも、大阪弁で喋って欲しかったです。自分の分身のような人物はいません。晋太郎は全然違うキャラクターですが、彼のセリフは私が実際に話したことです。



留学生ウモが赤い石を恭太に渡すシーンがとても印象的です。
「悪い心をつぶす赤い石」は宮本さんの創作ですか。

創

作です。ずっと以前、テレビのドキュメンタリー番組で、アフリカのどこかの村の長老が、神が宿る石で悪霊を払うのを見ました。非常に土俗的な宗教ですが、色や形がとても印象に残っていてそれを使いしました。

留学生を預かって、若くして大きな息子の「パパ」にられました。成人の息子を持つことになっていかがでしたか。

ま

私が30代後半の頃。父親として未熟だったので余計に衝突しました。年の離れた兄弟のようなものです。父親の資格なんてなかったですね。彼もそんな父親とつきあうのは難しかったです。夜中に、彼とビールを飲みながらよく話しました。それは彼の日本語のトレーニングでしたが、自分もヨーロッパのことなど知らないことをたくさん教えてもらいました。

留学生との暮らしの中で驚いたこと、大変だったこと等ありましたらお聞かせください。

人

間は大きなところではあまり変わりません。小さなことの違いが積み重なるのです。たとえば、こちらにとっては外国の親御さんから3年間預かっている大切な息子さんです。電車で痴漢に間違われたり、酔っ払いにからまれて喧嘩になったりして、彼が悪者にされたら国外退去にされてしまう。だから「絶対居場所を覚えておけ、どこに泊まるか電話してこい」と言うのには、しない。妻と彼とはそのことでしょっちゅう喧嘩になりました。ヨーロッパ言語では自立とは親から離れること。日本の親から見るとその自立はちょっと違います。



物語中で福造が「大阪弁を使うと、みんなが非難の目でわしを見よる。」と憤慨しますが…。

あ

これは僕の母のことです。ピシュティとしゃべるときはできるだけ標準語で、と決めていました。僕たちがしゃべっていると母が大阪弁で割って入ってくる。それを僕が注意すると「そんならもう一言もしゃべらへん。神戸で生まれて、大阪で育った私には大阪弁しかしゃべられへん」て本気で怒ってましたね。親子喧嘩に對してピシュティが「おばあちゃん、そんなこと言わないで」となだめる。でも日本語がまだよくわからないので「おばあちゃん、それおばあちゃんのひがみ」と言つて、また母が「ひがんでなんかいてへんわ」と。

「日本人を理解してむとりの優秀なハンガリー人を育てたい」という晋太郎の言葉があります。(下巻・P15)。
実際に宮本家で暮らした留学生が外交官として来日するという知らせを聞いたときのお気持ちは。

ソ

連が崩壊して、ベルリンの壁を市民が打ち壊している映像をテレビで見ている最中にピシュティが「ダバストから電話をしてみました。「共産主義は終わっちゃった!」と言叫んで、「嬉しい、嬉しい」とだけ言うて切りました。当時のハンガリーからの国際電話は、彼らにとって大変な金額です。

日本に留学し、日本の家庭で暮らした。当時、そんな経歴を持ったハンガリー人はいません。世の中が大きく変わったときに、ハンガリーの政府は、セルタハイ・イシュトバーンという人に白羽の矢を立てるだろうと思つていましたから、外交官として日本に来ると聞いてもそれは驚きではありませんでした。けれどもまだ40歳そこそこの若さで、大使になって帰ってくると聞いたときは驚きました。



物語中で、城田家の人々とボラージュは異文化衝突をします。宮本さんが経験された異文化衝突で思い出深いものはありますか。

ハンガリーでは「自立」とすると親から一切干渉されないんです。日本で「自立」というと「一人立ち」すること。自立したいなんて、自分の金で暮らす身分になつてから言え、面倒を見てもらっている身で言うなとなる。彼がまだ日本のことや日本語をよく知らない頃で、辞書の上の理解で「自立」をハンガリーではこうする、と主張するのでよく口論になりました。

物語中に恭太の国語の問題として、宮本さんの著書「泥の河」の二節が登場する場面がありますね。

あれは実話なんです。試験を受けて帰ってきた中学生の息子が、「解けるか？」と僕に出してきたのがあの問題。見ると僕の書いた「泥の河」で、作者の意図を30文字以内で述べよと書いてある。30文字で述べられないので小説を書いているのに。解いて答えを見たら間違ってる。「作者が言うてるのに、なんで間違いやねん。もうこんな勉強やめとけ！」と。ちよつど連載執筆中にそんなことがあつて書きました。よつぽど頭にきてたんでしょね。

この作品の魅力のひとつ、城田家の愛犬フックのモデルとなったアメリカン・ビーグル犬マックを飼うことになったいきさつ、忘れられない思い出等お聞かせください。

息

子たちに、犬を飼つてやろうと思いました。弱いもの、世話をしやらないと生きていけないものがそばにいた方がいいだろうと。ふらつと行つたペットショップで、なぜか目と目が合う犬がいる、それがマックです。家内が一目で気に入ってしまった。17歳（人間でいうと百歳）まで生きました。喧嘩、揉め事が本当に嫌いな犬で、自分はよその家へ行つていろんな犬と揉め事を起こすのに、家族の揉め事はいや。僕がちよつと大きな声を出すと悲しそうに遠吠えするのがたまらんです。マックの遠吠えを止めさせるために喧嘩の続きを翌日にしました。

イシュトバーン氏が留学中に作ってくれたハンガリー料理や、宮本さんが好きなハンガリー料理がありましたら、ぜひ教えてください。

ハンガリーは伝統ある国ですからいろいろな料理がありますが、グーラッシュ（ハンガリー風シチュー）がおいしいです。これは大量のラードを使うので、本式に作つたものは日本人の胃には合わないでしょう。子どもどものときから食べている彼らには、その家のカレーライスのようなものです。妻が日本風にアレンジして作りましたが、ピシユティには「これはグーラッシュではない」と不評でした。

宮本輝

平成二十二年十月

